

大縮尺の都市地図を用いた戦前期樺太における真岡の変容の検討

正会員○辻原万規彦*1 同 角 哲*2

9. 建築歴史・意匠-8. 都市史 建築歴史・意匠

樺太庁、区画測設事業、土地整理調査事業、火災保険特殊地図、北海道立文書館

1. はじめに

戦前期の樺太における都市の歴史の変容については、樺太庁が置かれた豊原や大泊を対象とした研究¹⁾はみられるが、それ以外の都市についてはほとんど対象とされていない。戦前期に日本の影響下にあった他の地域に比べて研究が立ち後れている。そこで、筆者らは、既報²⁾で、戦前期における樺太の都市史研究に資することを考え、これまでに収集した大縮尺の都市地図を都市ごとに時系列で整理した。さらに、既報³⁾では、測量事業との関連性も検討した。なお、関連する既往研究などは既報³⁾を参照されたい。

本稿では、戦前期の樺太で第三の都市であった真岡に着目して、戦前期の大縮尺の都市地図をさらに網羅的に追加収集して、当時の測量事業と地図作製の関係を検討した。さらに、これらの大縮尺の都市地図から読み取れる情報を整理して、地図の有用性を検討した。

本稿では、当時の用語や呼称はそのまま用い、引用文などは原則として現代仮名遣いに改めた。また、紙幅の関係から、戦前期の年号は元号のみを記した。

2. 戦前期の真岡を対象とした大縮尺の都市地図

既報²⁾と既報³⁾で収集した戦前期の真岡の大縮尺の地図に加えて、さらに追加で収集できたものをあわせて表1に示す。これまで真岡の大縮尺の都市地図を網羅的に収集して検討した既往研究は見当たらず、表1が初めてである。それぞれの都市地図の位置付けなどは、既報²⁾と既報³⁾を参照されたい。なお、1/50,000の地形図は縮尺が小さいため、都市の変容を検討するには不十分であるが、参考として表に挙げた。

3. 区画測設事業と真岡の都市地図の関係⁴⁾

日本は、日露戦争の際に樺太を占領した後、明治38年8月に樺太民政署を設置し、その後、明治40年3月にコルサコフ(のちの大泊)に樺太庁を設置した。

樺太民政署は、まずコルサコフで土地の「区画測設

(土地を一定の大きさに分割して区画する作業)を行い、明治38年9月に公布された樺太民政署コルサコフ支署令第1号『土地使用規則』によって土地の貸付を行った。真岡では明治39年に区画測設が行われた⁵⁾が、その結果を示した地図が、表1中の1の地図(図1。以下、「地図①」などとする。)であると考えられる。区画測設については、『土地区画測設規程』(大正10年3月、庁訓令第20号)や『土地調査心得』(明治40年4月、庁議決定)などの関連法規が確認できる。『土地区画測設規程』では、測量の方法のほか、定められた種類の標杭の位置を記入した原図(1/2,500)を成果物として提出することが定められていた。

区画測設の際に作製された原図は、現段階では未確認だが、それに近いと考えられるものが、北海道立文書館所蔵『樺太庁文書』中の『歳出予算資料〔一〕昭和十五年度』(請求番号:A9/52⑤)に挟み込まれていた『恵須取市街宅地実測圖』(大正14年7月調査、図2)である。恵須取は、大正13年に着工して翌年12月頃に操業を開始した樺太工業恵須取工場の立地によって、大正12年に594人であった人口が昭和3年末までの5年間で14,535人に急増した都市である⁶⁾。にもかかわらず、大正14年7月調査の『恵須取市街宅地実測圖』は、昭和12年夏発行の『樺太恵須取町勢一斑』⁷⁾に掲載された鳥瞰図、すなわち人口が急増した後の状況を示す地図、とほぼ同じ範囲の市街地を既に示している。将来の発展を見越して広い範囲の区画を測設したと考えられる。さらに、この地図には、「石標」(図2中の右上の拡大図中の◎)と「木標」(同図中の○)の位置が示されている。これらは『土地区画測設規程』で定められた標杭と考えられるが、街区の交差点に位置していた。したがって、区画測設による原図は、一筆ごとの土地を精確に測量した結果を用いて作製された地図ではないと推測される。さらに、区画測設に

よる原図を清書した地図が、樺太庁発行の市街図（真岡のものは地図④、図3）であると考えられる。昭和3年に樺太庁が発行した恵須取市街図（図は省略）と『恵須取市街宅地実測圖』の作製年に3年の開きがあるにもかかわらず、地番の記入方法と地番が記入されていない街区が全く同じあり、地図の表現方法も非常によく似ているためである。

4. 土地整理調査事業と真岡の都市地図の関係⁴⁾

「国有地及処分地相互間ノ境界ヲ判定シ国有地ノ位置形状並面積ヲ明確ニ調査スルヲ目的トシ」て、樺太庁の殖民課が担当して、昭和3年から土地整理調査を始め、実測の上、地籍原図を作製した⁸⁾。区画測設によって作製された地図では不精確な点が多かったためと考えられる。

『土地整理調査規則』（昭和3年4月、庁令第14号）と『土地整理調査心得』（昭和3年4月、訓令第279号）には、測量や製図の方法が定められており、原図の縮

尺は1/1,200、市街地における重要な地域の縮尺は1/600とされた。北海道立文書館所蔵の『樺太庁文書』中の『殖民課関係 昭和八年度』（請求番号：A9/2）所収の書類『土地整理関係』によれば、「土地整理調査ハ之レヲ大別シテ 三角測量 図根測量 細部測量トナ」した。三角測量では、参謀本部の陸地測量部が測設した三角点を基礎として、必要な三角点を増設して基準とした。図根測量では、図根点を測設し、細部測量（一筆測量）では、「予測」ののち、「立会通知」し、境界線を「査定」して、「実測」により数値を求め、「製図（原図作業）」を行った。

土地整理調査は、昭和3年から大泊で、昭和5年から真岡で実施された。真岡の火災保険特殊地図（以下、火保図）⁹⁾の地番図（地図⑩、図4）は、この土地整理調査で作製された地籍原図をもとに作製された可能性が高い。これは、以下の理由による。火保図の製作者である沼尻長治は、少なくとも日本国内の火保図

表1 これまでに収集できた戦前期の真岡を対象とした大縮尺の都市地図の一覧

No	種別	タイトル	発行年月日など	著者、発行者	縮尺	所蔵館	印刷所	備考
1	番	樺太マウカ市街区畫圖	M40. 5. 10	編集兼発行者：川口清治	1/3,000	国立国会図書館	印刷所：本間清造、印刷所：北海石版所	商工案内あり
2	海	日本 樺太西岸 真岡港及幌泊泊地	M42. 4. 5 刊行	水路部	1/14,590	国立国会図書館	水路部	M41 測量
3	地	真岡（假製樺太南部五万分一 豊原14號）	M44. 6. 15	著作権所有印刷兼発行者：陸地測量部（臨時測圖部）	1/50,000	国立国会図書館	陸地測量部	M42 測図、M44 製版
4	番	真岡市街圖	T14. 5 製	樺太庁	1/8,000	北海道大学附属図書館		
5	海	日本 樺太西岸 真岡港及幌泊泊地	M42. 4. 5 刊行、T2. 1. 21 再版、T14 小改正	水路部	1/14,590	海上保安庁海洋情報部	水路部	M41 測量
6	略	真岡市街圖（『真岡町要覽』）	T14. 8. 5	樺太真岡町役場	記入なし	筆者個人蔵	印刷所：本間清造、印刷所：北海石版所活版部	冊子に折り込み
7	番	真岡町全圖（『樺太真岡市街全圖』）	T14. 8. 7	三井興市	1/4,000	国際日本文化研究センター図書館	印刷所：本間清造、印刷所：北海石版所活版部	商工案内あり
8	地	真岡（假製樺太南部五万分一 豊原14號）	S2. 8. 30	著作権所有印刷兼発行者：陸地測量部、薩哈連州派遣軍司令部、臨時測圖部	1/50,000	国立国会図書館	陸地測量部、薩哈連州派遣軍司令部、臨時測圖部	M42 測図 T11 修正測図、M44 製版 S2 修正
9	略	真岡市街圖（『真岡案内』）	S3. 7 調製	発行所：樺太真岡町役場、真岡商工会議所	記入なし	小樽商科大学附属図書館	印刷所：福井友右エ門、印刷所：福井印刷所（真岡）	裏面は「真岡町勢の概要」
10	鳥	樺太真岡港發展繪圖	S5. 7. 1	著作権発行人：富樫隆二良、発行所：真岡町役場、真岡商工会議所	不明	小樽商科大学附属図書館		S5. 6 富樫隆二良写生、裏面は「真岡町産業概況」
11	海	日本 樺太西岸 真岡港及幌泊泊地	M42. 4. 5 刊行、T15. 1. 16 改版、S5 小改正	水路部	1/14,590	海上保安庁海洋情報部	水路部	M41 測量
12	海	日本 樺太西岸 真岡港/日本 樺太西岸 幌泊泊地	S6. 3. 28 刊行、S6. 4. 25 発行	水路部	1/14,590	国立国会図書館	水路部	M41 測量、S5 迄の資料
13	地	樺太真岡（假製版（五万分一地形圖 豊原 14 號））	S6. 9. 30	大日本帝國陸地測量部	1/50,000	国立国会図書館	（大日本帝國陸地測量部）	S5 測図
14	略	真岡市街圖（『真岡要覽』）	S8. 8. 10	編集兼発行者：吉池力行、発行所：樺太真岡町役場、真岡商工会議所	記入なし	国立国会図書館	印刷所：片野民清、印刷所：片野印刷所（真岡）	冊子に折り込み
15	火?	樺太 真岡町	S9. 12 作製	地図研究所（沼尻長治）	1/8,000	国立国会図書館	地図研究所	地図協会発行「地図の友」第185号付録
16	火	火災保険特殊地図（真岡、方面図）	S9. 12 作製	地図研究所（沼尻長治）	1/4,000	千代田区立日比谷図書文化館	地図研究所	計3面
17	火	火災保険特殊地図（真岡、地番図）	S9. 12 作製	地図研究所（沼尻長治）	1/1,200	千代田区立日比谷図書文化館	地図研究所	計14面（No.3とNo.10欠、No.16のみ1/3,000程度） （真岡第二期築港起工記念 真岡商工会議所）
18	港	真岡港平面圖	S10 か	不明	1/10,000	札幌市立図書館デジタルライブラリー	不明	
19	海	日本 樺太西岸 真岡港/日本 樺太西岸 幌泊泊地	S6. 3. 28 刊行、S6. 4. 25 発行、S11 小改正	水路部	1/14,590	海上保安庁海洋情報部	水路部	M41 測量、S5 迄の資料
20	番	真岡町市街圖（『真岡地方案内』）	S12. 6. 10	編集兼印刷発行人：箱島政一、発行所：真岡町役場	1/4,000	北海道立図書館	印刷所：中西寫真製版印刷所	裏面は「真岡町概況」、商工案内あり
21	海	日本 樺太西岸 真岡港/日本 樺太西岸 幌泊泊地	S6. 3. 28 刊行、S6. 4. 25 発行、S12 小改正	水路部	1/14,590	国立国会図書館	水路部	M41 測量、S5 迄の資料
22	海	日本 樺太西岸 真岡港/日本 樺太西岸 幌泊泊地	S6. 3. 28 刊行、S6. 4. 25 発行、S35 小改正	水路部	1/14,590	国立国会図書館	水路部	M41 測量、S5 迄の資料
23	樺/番	真岡市街圖	不明	（樺太庁文書 歳出予算資料〔一〕 昭和十五年）	1/10,000	北海道立文書館	不明	原図の作製年は不明
24	樺/港	真岡港平面圖	不明	（樺太庁文書 予算資料 交通部 昭和十四年度）	1/10,000	北海道立文書館	不明	原図の作製年は不明
25	樺/港	真岡港平面圖	不明	（樺太庁文書 拓殖計画 上希望事項 〔昭和十六年度〕）	1/10,000	北海道立文書館	不明	原図の作製年は不明

注) 種別は以下の通り。番：地番まで記入された地図、海：海図、地：地形図、略：略図、鳥：鳥瞰図、火：火災保険特殊地図、港：主に港湾を描いた地図、樺：『樺太庁文書』中の地図。

の作製には土地台帳と公図を利用したと述べている⁹⁾。さらに、この地番図は、土地整理調査で作製された地籍原図の縮尺と同じ1/1,200で作製されている。また、火保図の方面図（地図⑩、図5）は、区画測設の成果を用いて作製されたと考えられる樺太庁発行の市街図（地図④、図3）とは、大きく異なっている。区画測設の成果ではない情報から地番図を作製し、その情報を統合して方面図を作製したためと考えられる。

5. 真岡の都市地図からみた都市の変容

1) 明治期における真岡の市街地と都市地図

地図①（図1）で示される明治40年の町名は、明治42年（地図②）には新しい町名に変更されている。撫子町と若葉町が南浜町に、紅梅町と朝顔町が本町に、菫町と葵町が栄町に、白萩町が中町に、桜町と紅葉町が北浜町に、黄菊町と椰町が山下町に変更された。また、後の高浜町一帯には「第二期市街予定地」と記入され、区画は描かれているものの地番は未記入である。ただし、春雨町は、明治42年でも同じ地名である。春雨町は、明治40年には、貸座敷業が少なくとも3軒あ

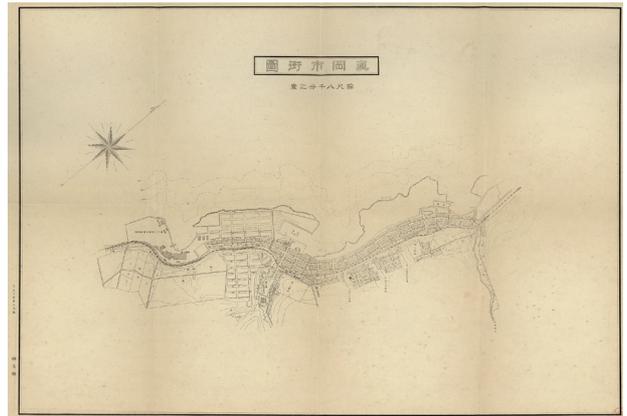


図3 真岡市街圖（表1の4）

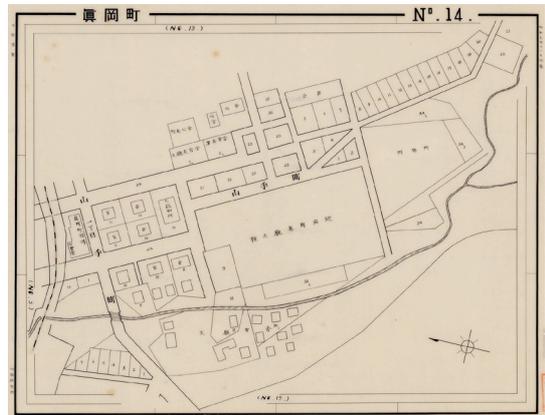


図4 火災保険特殊地図（地番図）（表1の17）¹¹⁾



図1 樺太マウカ市街區畫圖（表1の1）



図5 火災保険特殊地図（方面図）（表1の16）¹¹⁾

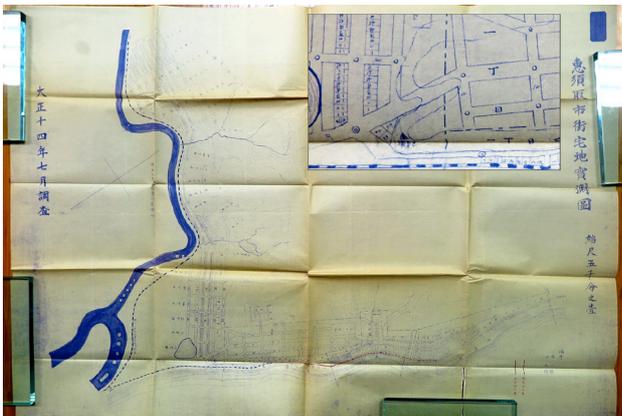


図2 恵須取市街宅地實測圖（右上は一部拡大）¹⁰⁾

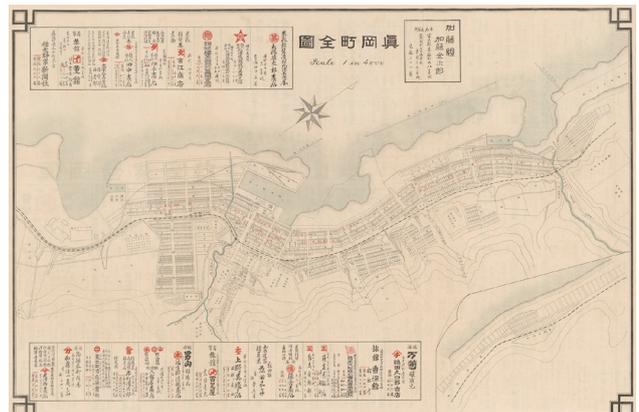


図6 真岡町全圖（『樺太真岡市街全圖』）（表1の7）

り、遊郭だったと推測されるが、大正8年9月に操業を開始した樺太工場真岡工場の敷地となったため、後には、町名自体が消滅した（地図④（図3））。

当初のマウカ支庁は、のちの真岡病院の位置にあったと考えられる。警察署と郵便局の敷地は、昭和12年（地図⑩）に至るまで変わっていない。また、地図①では、マウカ川の河口から明治40年当時のマウカ支庁に至る道を基準に、南側と北側にそれぞれ地番が順番に振られているので、この道をマウカの中心線と考え、区画測設を実施したと考えられる。

2) 大正期における真岡の市街地と都市地図

地図④（図3）は大正14年発行であるが、区画測設によって作製された地図を清書したものと考えられるので、同じ大正14年発行の地図⑦（図6）よりも、古い情報を示す可能性が高い。地図⑦に描かれている情報でも、地図④には描かれていないからである。ただし、地図⑦も地図④を参考に描かれたと考えられ、地図④は樺太庁の発行であるので官公庁の位置などは精確であると考えられる。

地図④（図3）には、大正9年に開通した本斗・真岡間の樺太庁鉄道（のちの樺太西線）が描かれている。樺太庁鉄道の東側の段丘面上の旭町、台町、上町は区画が測設され、地番も記入されている。しかし、大正14年小改正の地図⑤では、旭町と上町にはほとんど建物が描かれておらず、この時点は区画を測設したに過ぎなかったと考えられる。この後、昭和12年発行の地図⑩まで、区画は大きく変更されておらず、この段階で、段丘面上の3町の区画は完成したと考えられる。なお、地図⑩では、台町に「遊郭」と記入されているため、春雨町にあった遊郭が移転したと考えられる。

高浜町には、地図④（図3）では地番が記入されていないが、地図⑦（図6）では記入されている。しかし、昭和5年小改正の地図⑪で描かれる建物はまだまばらである。石浜町と永浜町の町名は、地図⑦が初出であり、地番も記入されている。昭和5年小改正の地図⑪では市街地表記になっておらず、昭和6年刊行の地図⑫で市街地表記になるので、実際に建物が建ち並ぶのは少し後になってからであったと考えられる。

また、入船町の南、北浜町2～4丁目の沖合には、「船

入潤予定地」、「倉庫予定地」と記入されているが、1960年小改正の地図⑬にも描かれておらず、終戦までに実現しなかったと考えられる。

以上のことを考えれば、大正14年当時に、戦前期真岡の市街地の骨格はほぼ完成したものと考えられる。

3) 昭和期における真岡の市街地と都市地図

地図⑬は、地図④と非常に良く似た地図である。しかし、上町の女学校、高浜町の真岡中学校、権工クラブなどは修正されているので、地図④を写したのち、大正14年から変更のあった部分を修正したと考えられる。また、地図⑩も地図④を基に作製されたと考えられるが、精確に引き写してはならず、地図としての精確さは劣る。なお、昭和期の真岡の市街地については、戦後に復元された地図の情報も取り入れて検討する必要があるが、今後の課題である。

6. まとめ

本稿では、戦前期樺太の真岡に着目して、大縮尺の都市地図をさらに網羅的に収集して、当時の測量事業と地図作製の関係、都市地図から読み取れる情報と市街地の変容の関係などを検討した。

謝辞 本稿は、JSPS 科研費 26420647, 17K06754 ならびに 15H04109 の助成を受けた成果の一部である。地図の閲覧とデジタル化では、北海道大学附属図書館、北海道立図書館、札幌市中央図書館、北海道立文書館、千代田区立日比谷図書文化館、海洋保安庁海洋情報部海洋情報資料館、国際日本文化研究センター図書館、小樽商科大学附属図書館、熊本県立大学学術情報メディアセンター図書館、(株)都市整図社、(株)富士マイクロ、(株)サンコー、柏書房(株)にお世話になった。奈良大学文学部の三木理史先生、山口大学大学院創成科学研究科の山本晴彦先生からは貴重なご助言を賜った。

注・参考文献・引用文献

- 1) 井潤裕：サハリンのなかの日本 都市と建築，東洋書店，2007.6。三木理史：移住型植民地樺太の形成，塙書房，2012.10 など。
- 2) 辻原，角：戦前期における樺太の大縮尺都市地図の収集と整理，建築学会九州支部研究報告，第57号・3〔計画系〕，pp.677～680，2018.3
- 3) 辻原万規彦，角哲：戦前期樺太における大縮尺の都市地図，戦前期樺太火災保険特殊地図集成 別冊解題，柏書房，pp.3～23，2018.7
- 4) この項の一部は，文献3)の一部を再構成した。
- 5) 樺太庁編：樺太庁施政三十年史 上，原書房，1973.12（ただし，原本発行は1936）
- 6) 山本三生編：日本地理大系 第10巻 北海道・樺太篇，改造社，1930.2
- 7) 北海道立図書館北方資料デジタルライブラリー所蔵（請求番号：Y351.91/E）
- 8) 北海道立文書館所蔵『樺太庁文書』中の『殖民課関係 昭和八年度』（請求番号：A9/2）所収の書類「殖民課事務ノ沿革概要」
- 9) 火災保険特殊地図の詳細は，文献3)と以下を参照。辻原万規彦：戦前期台湾の火災保険特殊地図，戦前期台湾火災保険特殊地図集成① 別冊解題，柏書房，pp.3～19，2018.3。
- 10) 北海道立文書館所蔵『樺太庁文書』中の『歳出予算資料〔一〕 昭和十五年度』（請求番号：A9/52⑤）に所収の『須取町市街地実測圖』
- 11) 辻原万規彦・角哲編：戦前期樺太火災保険特殊地図集成-付・樺太庁発行市街図・旧版海図ほか，柏書房，2018.7

*1：熊本県立大学環境共生学部 教授・博士（工学）

*2：名古屋市立大学大学院芸術工学研究科 准教授・博士（工学）

Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Nagoya City University, Dr. Eng.